

日経MJ 2016年 2月10日付

人工知能の将来

コンピューターが囲碁でプロの棋士を負かせたという。チェスや将棋ですでにコンピューターの方が強いことは知られていたが、複雑なパターンを持つ囲碁では人間の方が強いと言われてきた。その囲碁でもコンピューターの能力がプロの棋士を超えたというのだ。

最近、人工知能のパワーを見せつけられる機会が多い。物づくりの世界では、技能を自主学習する機械が目立っている。人間がいちいち教え込まなくても、試行錯誤で次第に精度を上昇させる能力を持っている機械だ。

ファナックが人工知能のベンチャーのプリファード・ネットワークスと開発した製品がよく報道されている。こうした自主学習能力



伊藤元重の

エコノウオッチ

を持つ機械が増えれば、生産現場での人間の技能の重要性は低下していくことになる。コンピューターの学習能力がプロ棋士のそれを超えたように、人工知能を備えた機械の学習能力が職人の匠(たくみ)の技を超えようとしているのだ。

こうした人工知能の可能性は意外な分野でも語られ始めている。たとえば、金融市場の動向を判断するアナリストの世界にも人工知能を導入する試みが始まっているようだ。

たとえば、過去から中央銀行が発表してきた膨大な文章を解析することで、新たな中央銀行総裁の発言から次の動きを読むこと。これは、旧来は中央銀行のウオッチャーや市場のアナリストの仕事であった。しかし、膨大な情報量を的確に

匠の技やアナリストにも

分析して判断するのは、人工知能の方が優れているのかもしれない。

中央銀行総裁の記者会見の音声を人工知能のチェックにかけたらどうなるだろうか。これまではその発言の微妙なニュアンスや強弱を人間が聞き取って評価をしたわけだが、これも人工知能の方がより正確に分析できるかもしれない。「人工知能が発達すれば、自分たちはいらなくなる」とおっしゃるアナリストが言っていたが、あなたが間違っていないのかもしれない。

経産省の研究會などで、こうした技術革新によってどのような職種が縮小し、どのような職種が残るのかについて、詳細な検討が始まっている。人工知能などを活用してより強力な役割を発揮できる職種もあるだろうし、コンピュータに仕事を奪われる職種もあるだろう。こうした変化

の方向性を見極めそれに対して適切な対応をとることが、個人はもちろん企業や社会にも求められる。

人工知能の能力が人類の知的能力を超えるポイントを、専門家はシンギュラリティ(技術的特異点)と呼ぶようだ。その特異点の先で何が起るのか、私などには想像もつかない。ただ、特異点はまだ先のこととしても、足元で人工知能の能力が大変なスピードで強化されていることは確かだ。ビジネスの視点からも、この技術革新の動きにどう対応するかということが、重要な課題となっていることは間違いない。

皆さんの会社は、人工知能の進化に何らかの対応をしているのだろうか。あるいは、そうした変化とはまったく無縁であるのだろうか。

(東京大学大学院
経済学研究科教授)